

司教のための社会問題研修会

日本カトリック司教団は2021年12月、「司教のための社会問題研修会」を行い、全国の司教16人、使徒座管理者2人が参加した。テーマは「日本の入管制度の現状と課題」保護されるべき難民、非正規滞在者をめぐって。司教たちは、この問題に取り組み続けている人や当事者を招いて現状を学び、司教として何が出来るか、検討を始めた。研修会の内容を二回に分けて紹介する、その後半。

「教会が断ることはできない」

駒井知会弁護士に続き、大阪教区の社会活動センター「シナピス」(所長・松浦謙神父)の事務局課長、ビスカルド篤子さんと、ペルーにルーツのある20歳の大学生、みゆきさん(仮名)が話をした。シナピスは、日本に逃れて来た難民や、さまざまな事情で在留資格のない人たちの最後の場所になっている。その人々への支援を「教会が断ることはできない」と、ビスカ

入管の現状と課題

② 日本で生まれ育った子どもの声を聞く

ドさんたちは限られた人数で長年、奮闘し続けてきた。みゆきさんの家族もシナピスが支えてきた人たちだ。みゆきさんの両親は、1990年代にペルーから来日した。当時、ペルーは経済が破綻し、テロが横行して命が脅かされる状況にあった。両親は在留資格を得ていなかったが、出稼ぎ労働者としてつましく暮らしてきた。みゆきさんと弟は日本生まれの日本育ちで日本語だけを話す。しかし、両親に在留資格がなかったため、子ども



話に耳を傾ける司教たち

望みはただ家族と暮らすこと

みゆきさんは友人の誘いはりモートでこの研修会に臨み、司教たちには、はつきりとした口調で語り掛けた。「こんにちは」は、みゆきと申します。私は親に在留資格がなかったため、入管から家族全員母国に帰るよう言われました。10年間、家族全員の在留資格を求めて闘って

「子どもは友人の誘いはりモートでこの研修会に臨み、司教たちには、はつきりとした口調で語り掛けた。」「こんにちは」は、みゆきと申します。私は親に在留資格がなかったため、入管から家族全員母国に帰るよう言われました。10年間、家族全員の在留資格を求めて闘って

てしまった。その後、母子3人が日本で暮らし続けられるよう在留特別許可を求めたものの、17年7月、入管は10代だった一家4人の在留資格を求めてきたが、2015年、最高裁で敗訴が確定。翌年、父親はペルーに強制送還され

資格を求めて闘っていらさうですが、毎日不安が絶えないのです。みゆきさんは現在、母国語であるスペイン語は話せない。それは父親が、子どもたちが日本で不自由なく暮らせるようにと、極力家の中で日本語で話し、平仮名と片仮名、漢字を教えてくれたからだ。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

司教としてできることを

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけできると話す。